

## ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

牧師 山本 護



初めて買った詩集は中原中也。高校生になった頃、駅前の本屋で手に取り、さんざん迷って買った。そこから『荒地』の鮎川信夫や田村隆一に辿り着くまですぐだった。

中原中也の『サーカス(昭和4年)』。「～サーカス小屋は高い梁／そこに一つのブランコだ／見るともないブランコだ／頭倒(か)さに手を垂れて／汚れた木綿の屋蓋(ヤ)のもと／ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん～」。

サーカス小屋の空中ブランコは、七五調の物寂しいリズム。三拍子の不吉なジンの隙間から、隣りの見世物小屋の口上が聞こえる。「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」という独特のオノマトペ(擬声語)は、「幾時代かがありまして／茶色い戦争ありました」という詩の書き出しと共に広く知られています。

遠い日、公園のブランコをおもいきり漕いで、頭が地面につきそうなくらい背中を反らせると、天地が逆になって眩暈が誘発され、木々や青空がコマ落とし画面のように素早く入れ替わった。サーカスの空中ブランコ乗りは毎晩「頭倒(か)さに手を垂れて」、地に降りられず、天にも昇れず、コマ落とし画面を命がけで統合していた。

教会裏の林、ツリーハウスを支えている桜の太い枝に、青柳均さんがブランコを吊ってくれました。控えめに漕いでみただけで、「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」という響きを感じます。わずか数センチ地上から足が離れただけで、生きている寄る辺なさと、地の支配から脱した清々しさが味わえる。子供のものと思っていたけれども、「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」と、天への方位を指し示してくれる神秘の遊具です。

「この幕屋に住むわたしたちは重荷を負ってうめいているが、それは地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではない。死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまうために、天から与えられる住みかを上に着たいからだ(Ⅱコリント 5:4)」。

聖句を解釈できても、実感になるとは限らない。また、解釈できずとも感覚が共鳴することもあります。そんな試みのために、ほんの15分「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」となり、地上に支えられた住みかから遊離してみてもどうでしょうか。ひょっとすると、眩暈と共に「天から与えられる住みか」の幻が垣間見られるかもしれません。Ω